

テーマ

歴史から見えてくる家族の姿

適用
分野

家族に関わる問題の起源を探ることにより、現代の日本社会を読み解く

研究
名称

親子関係や男女の役割の歴史

氏名
所属

中里英樹 教授
文学部 社会学科



内容

●特徴

人生全般にわたる親子関係について、近世・近代の史料をもとに分析する。日本では、家父長的な大家族が連綿と続いてきたかのような印象があるが、実際はどうだったのか。規範やイメージを映し出す〈質的資料〉と、実態を捉える〈量的資料〉の両者を用いることにより、家族関係についての思い込みをはずしていく。

●研究内容

日本の伝統的家族像、とりわけ、親世代との同居や、男性が外で働き、女性が家を守るという性別役割分業体制は、有史以来の自然な営みであるといった言説を耳にする。だが、庶民の実際の暮らしに関わる史料を繙いてみると、当時の人々が、必ずしもそうした価値観を体現するような生き方をしていたとは限らないようである。

例えば、江戸時代の「宗門改帳」に表れる家族構成を分析すると、老人のいる家ほど子の同居率が高いというわけでもない。離れた土地に住む親子間の

往復書簡には、現代社会と何ら変わらない核家族の姿も描かれている。

明治期になると、小学校の修身教科書に、性別にまつわる規範意識を説く記述が見られるようになる。その一方で、家庭雑誌の記事から、元来男性の役目であった家計の管理が、次第に女性に任されていたことがわかる。

現代の日本社会は、家族のあり方や男女の生き方について、模索の時を迎えている。史料に表れる家族像の変遷から、現代の家族問題を考えていく。

キーワード

歴史人口学、家族社会学、家族史、ジェンダー、男女共同参画、親子関係

連携方法

☐ 講演 ☐ 研修 ☒ 研究相談 ☐ 学術調査 ☒ コメント ☐ 共同研究